様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｈ００９３８

研究課題名（和文）近代日独の社会学説と高等教育をめぐる知的交流の実相に関する歴史社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological Study on Social Theory and Higher Education with Intellectual Interaction between Japanese and German Social Scientists in the late 19th and early 20th Centuries

研究代表者
野崎　敏郎（Nozaki, Toshiro）

佛教大学・社会学部・教授

研究者番号：４０２５３３６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,600,000円

研究成果の概要（和文）：　近代日独の社会学説と高等教育にかかわる諸事象について、多角的に調査を進め、その当時の学術活動と教育活動と政治・社会状況とを関連づけて考察した。明治期にかんしては、来日して教育研究活動に当たっていたカール・ラートゲンを中心に考察し、また帝国大学の設置（1886年）にかかわる諸問題を掘り下げた。また、ラートゲンの帰国後、彼の日本研究の成果は、ハイデルベルクで同僚だったマックス・ヴェーバーによって摂取されており、ヴェーバーによる日本の社会・宗教観の発展についても検討した。さらに、近代資本主義にかんするヴェーバーとヴェルナー・ゾンバルトとの論争等の再検証と再評価を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　明治前期から中期にかけてのドイツ社会学説の日本への移入実態にかんしては、きわめて資料が乏しく、実態解明が遅れていた。本研究は、1882年に来日し、1890年まで教育活動に当たっていた社会経済学者カール・ラートゲンの滞日書簡記述をはじめとする新資料に依拠して、その移入実態の一端を明らかにした。また、従来の研究では、いわゆる「御雇外国人」が、あたかも明治政府に利用された存在にすぎないかのように扱われていたが、本研究においては、来日したラートゲンのほか、ドイツに留学した日本人学生を指導したドイツ人学者たちの活動の総体を視野に収めることに努めた。

研究成果の概要（英文）：We are engaged in research about social theory and higher education in early modern Japan and Germany, and gave the subject some consideration from a diversified perspective, relating academic activity, education and political and social circumstances. About the Meiji-era we focused on teaching and researching activity of a young German social scientist Karl Rathgen, and various problems related to the foundation of the Imperial University (1886). Rathgen, after return to his country, brought out some works on Japanese history, economy and finance, and had a major influence on German economists and sociologists in his era. Especially Max Weber, his colleague in Heidelberg, learned from him and developed the view of Japanese society and religion. Besides, we considered Weber's argument on the modern capitalism with Werner Sombart, and reexamined and re-evaluated their contribution to the theory of capitalism.

研究分野：歴史社会学

キーワード：日独学術交流史　日本社会思想史　ドイツ社会思想史　日本の大学史　ドイツの大学史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1880 年代頃からの日独学術交流が、明確な政治的・国策的意図をもって進められたことはよく知られている。その交流のなかで、明治政府とドイツ（主としてプロイセン）の政府との間で、それぞれの思惑が交錯していたことも、ある程度まで知られている。しかしその一方で、ドイツから日本に渡航して、日本の立法や制度づくりに直接携わった学者たち（ヘルマン・レースラー、アルベルト・モッセ）と明治政府とのあいだには、かなりはっきりした確執や対立が生じていたことも、近年わかってきた。明治政府とその代弁者たちが描いてみせる「独逸学」の内容物と、当のドイツ人社会科学者たちの有する見識・思想とは、むしろ往々にして相容れない性格のものだったと思われる。

しかし、資料不足もあって、従来の多くの研究では、たんに「御雇外国人」が明治政府に奉仕し、日本における独逸学の繁栄に貢献したという平板な図式をあらかじめ引いた上で、その図式のなかにモッセやラートゲンらを嵌め込むという硬直した一面的な議論がなされていたにすぎない。また、ラートゲンらの活動は、当然にも、日本に関連する研究課題にのみ限定されていないのだが、従来の「御雇外国人」研究にあっては、ともすれば、日本と直接関わりをもつ彼らの活動に限定されてしまっていた。

２．研究の目的

本研究課題では、上記のような従来の研究手法の問題点を克服するため、まず、日独学術交流に加わったドイツ人学者たち自身の直接の言説や信頼できる活動記録を探り当て、それに依拠して、明治政府、プロイセン政府、日本人学者、ドイツ人学者それぞれの存立の実像に迫り、個々の人物像の刷新を図り、日独学術交流史の書き替えを進めることにした。また、ラートゲンらの活動のうち、日本に関連する事項にのみ限定せず、各研究者の生涯における活動の全体像を見通すための基礎資料づくりを心がけた。さらに、第二帝政期ドイツにおいては、各研究者の夫人をはじめとする女性たちの活動が、夫たちの活動に影響を及ぼしているので、この領域にも踏みこんで考証を進めた。

日独の学術交流史のなかで、社会科学にかんする交流史の初期に位置づけられるカール・ラートゲンの滞日活動と、その後におけるラートゲン人脈（ラートゲン門下の日本人たちおよびラートゲンと交流のあったドイツ人学者たち）の動向は、従来解明がひどく遅れており、研究上の《空隙》（ミッシング・リンク）となっていた。したがって、ターゲットとなる人物にかんする情報を幅広く集め、それを紹介すること自体に重要な意義がある。

また、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、学問領域そのものの再編が進んでおり、今日では経済思想・政治学・社会学・法社会学・ジェンダー論等々へと分化している内容物が、当時においては渾然としたまま論じられていた。それらを、歴史的パースペクティヴにおいて論ずるためには、当時の日独の大学と学術研究にかんする諸問題との係わりを重視しなくてはならない。そこで、こうした複合的・学際的な内容物を多角的に検討するため、本研究は、大学史研究者を含む多様な領域の研究者を糾合し、各メンバー相互間の理解を図りつつ、包括的な研究成果を目指すことにした。

３．研究の方法

(1)　史料の発掘と分析

上記のような《空隙》を埋める重要な史実を突き止めるため、ドイツ各地に遺されている未公刊史料および稀覯文献（新聞記事等も含む）を蒐集した。

ラートゲンに関しては、彼の直系子孫からわれわれ研究グループに直接提供された史料のほか、マールブルク州立公文書館、ハイデルベルク大学図書館手稿室、ハンブルク州立公文書館、ハンブルク大学史史料室に所蔵されている史料を用いた。

マックス・ヴェーバー、マリアンネ・ヴェーバー、ヴェルナー・ゾンバルトに関しては、バイエルン州立図書館手稿室（ミュンヒェン）、プロイセン文化財枢密公文書館（ベルリン）、ハイデルベルク大学公文書館、カールスルーエ総合公文書館、連邦公文書館コブレンツ館に所蔵されている史料を用いた。

日本においては、国立国会図書館憲政資料室、東京大学文書館、外務省外交史料館、東京国立科学博物館に所蔵されているラートゲン関連史料および帝国大学関連史料を用いた。

なお、ラートゲン滞日書簡集に関しては、ラートゲンの次女イルムガルトによって判読されたタイプ打ち原稿を利用できたが、そこには判読ミスが相当数認められる。一方、書簡の現物は現在行方がわからなくなっており、探索したところ、その複写物がライプツィヒ民俗学博物館に所蔵されていることが判明し、同館から二次コピーが提供される手筈になっていた。ところが、同館側の手違いと、コロナ禍のため同館の業務が停止されたことから、提供が大幅に遅れ、本研究

課題終了直前期に、ようやく二次コピーを入手することができた。その精密な判読・整理・分析は今後の課題である。

（2）　新知見の意味づけ

上記の史料と、日独各地の図書館において閲覧した稀覯文献、また古書サイトによって購入できた戦前期の稀覯本によって、多くの新知見が得られた。それらを集積して、日独学術交流史、社会科学発展史、日独大学史といったさまざまな角度から考証を進めた。

（3）　学際的・多角的な検討

本研究計画によって、おおよそ 1880 年代から 1945 年までの日独の社会科学者たちの営みと大学問題とを重ねあわせ、埋もれていた史実に光を当て、近代日独の社会学説史および社会科学者の国際交流活動の再検討を進めた。そのまとめとして予定していた国際シンポジウムは、コロナ禍のため延期となり、本研究の活動を延長・繰越して、2021 年度に実施した。これは、対面とリモートとのハイブリッド形式で開催し、社会学、経済学、ドイツ大学史学、教育史学、法史学の専門家による討議によって、充実した成果を得た（2022 年 1 月 22 日）。

なお、このシンポジウムにおいては、恒木、三笘、野崎、田中のほか、研究協力者であるドイツ大学史研究者・別府昭郎も、「第二帝政期のドイツ大学」と題した報告を行った。

（4）　総合的・包括的な研究成果に向けて

この研究活動によって得られた新知見の一部は、すでに論文等の形で公表した。今後、上記シンポジウムの成果を踏まえ、さらに包括的な成果発表を見込んでいる。

４．研究成果

（1）　日独学術交流史の視座転換

われわれの研究活動によって、まず、戦前期日本におけるマックス・ヴェーバー受容が、大塚久雄らの時局認識によって大きな変質を被っていたことが判明した。また、帝国大学設置前後の状況から、ビスマルクやアルトホフによる大学支配および大学自治の否定が、伊藤博文らを通じて、日本の大学行政に大きな影響を及ぼしていた可能性が浮上した。その一方で、カール・ラートゲンは、アルトホフと個人的交友関係があるにもかかわらず、その 8 年にわたる滞日教育活動において、一貫して大学の自治と学問の自由を擁護していたこと、またラートゲンが、伊藤博文らによる寡頭制支配を鋭く批判していたことも判明した。

初期帝国大学にかんしては、森有礼の果たした役割を洗い直すべきことがわかった。また、日本の支配層によって把握されていた「独逸学」と、ラートゲンらが直接学生に説いていたドイツ社会科学とのあいだに、大きな懸隔が存在することも明らかになった。

こうした新知見は、未公刊史料をはじめとして、これまでほとんど知られていなかった新資料や稀覯文献をわれわれが発掘したことによってもたらされた成果である。以下に、個別領域における主な成果を挙げる。

（2）　カール・ラートゲンと帝国大学にかんする新知見

ラートゲン在職時の帝国大学（初期帝国大学）は、一部の論者が想像しているような「帝国大学体制」と言えるほどの確立した組織ではなく、流動性・柔軟性の高い状況であったことを解明した。また、ラートゲン帰国の理由は、直接には、彼が伊藤博文らの政治路線に協力するつもりがないことだが、同時に、日本に見切りをつけた事情には、帝国大学のこの財政的基盤の危うさが関係している可能性もあると思われる。

大学教育のあり方に関して、ラートゲンは、着任当初から、ゼミナール演習を導入すべきことを主張し、それを自主的に企画し、実施していた。これは、彼がシュトラースブルク大学在学時に参加していたグスタフ・シュモラーとゲオルク・フリードリヒ・クナップとの合同ゼミから学んだものである。東京大学が帝国大学へと再編されたとき、彼は法科大学に所属し、ここで「行政学演習」を担当した。このとき、東京大学時代に実施していた自主ゼミが、正規科目として制度化されたのである。これは日本初のゼミナール演習であり、学生の研究発表とディスカッションによって、知識の応用能力を高める道が拓かれた。

併せて、医学雑誌の記事から、ラートゲンの大日本私立衛生会における講演の具体像・関連人物（通訳など）を明らかにした。

日本大学史に関連して、初期帝国大学の諸制度と、帝大内の人物や、私立学校を含む内外の人脈について調査した結果、森一新島の人脈（アメリカ人脈）を通して、同志社から留学を経て帝大への進学や就職という道を進む者が複数存在することが判明した。

（3）　日独の大学問題と社会科学者たち

十九世紀後半から二十世紀初頭にかけての日独の諸大学は、研究面で大きな発展がみられるとともに、細分化されつつある諸領域の教育活動をごく少数の教員で担わなくてはならないという矛盾を抱えており、巨大化しつつある組織の運営にも多くの問題がみられた。とりわけ、科

学研究に大きな予算が必要となってきたため、研究予算を配分する文部行政省による大学への介入が激しくなり、官僚支配と大学自治との緊張が増していた。

こうした状況下で、プロイセンにおいては、豪腕として知られていた文部官僚フリードリヒ・アルトホフによる専断と大学自治の切り崩し工作が顕著であり、ラートゲン、ゾンバルト、ヴェーバーらのドイツ人社会科学者たちにとって、アルトホフ体制との対峙が不可避であった。また日本人留学生のなかでは、井上哲次郎が、直接アルトホフから依頼されてベルリンで日本語教育に当たっていた。

アルトホフ体制に関わる史料を分析した結果、1890 年代に、アルトホフは、ベルリンにパウル・ラーバントを招聘し、ラーバントの協力を得て、社会民主党の活動家でもあるベルリン大学私講師レーオ・アーロンスを罷免することを企んでいたことが明らかになった。そして、1893 年から 1894 年にかけて、アルトホフは、ヴェーバーを、ラーバント招聘のために利用しようとしていたこと、またヴェーバーは、そのような《持ち駒》として利用されることを嫌って、フライブルク大学への移籍を押しとおしたことが判明した。またその少し後の時期に、ゾンバルトは、講義開講に関する変則的な要望を咎められ、アルトホフによって冷遇されるに至ったことも判明した。

一方、ラートゲンは、シュトラースブルク大学在学時に、同大学法学・国家学部で教鞭を執っていたアルトホフと知り合い、その後もアルトホフによる就職斡旋等の便宜を得ている。しかし、大学のありかたに関しては、アルトホフとは異なり、ラートゲンは明確な大学自治擁護の見地をとっており、そのことは、滞日時の講義ノート（阪谷芳郎による英語筆記）にも記されている。また、ラートゲンが 1907 年から勤務したハンブルク拓殖研究学院を、自治権を有する大学へと改組することについて、一貫して積極的な姿勢をとっていた。こうしたラートゲンの大学観について、さらに考察する必要があると思われる。

（4）　マックス・ヴェーバーの社会科学論と戦時下日本の社会科学者たちをめぐって

日独社会科学交流史において重要なのは、戦前期におけるヴェーバー受容の問題性である。そこで、ヴェーバーの『客観性』論文が、科学と実践とを結ぶ位置にあることを解明し、また『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の問題設定と関わらせて、ヴェーバーの日本への受容のあり方、およびその問題性を考究した。

大河内一男や出口勇蔵らによって導入されたヴェーバーの「没価値性」論は、シュモラーをはじめとした社会政策学会での議論、つまり、価値判断を混入させる議論に対して、価値判断を排除した社会科学のあり方を模索するというものとなっていた。しかし、ヴェーバーはいわゆる社会科学にとどまらず、十九世紀から二十世紀に立ち上がるさまざまな「科学」――進化論や優生学や一元論的世界観――への批判の中で価値自由（Wertfreiheit）を考えていた。ヴェーバーが視野に収めていた諸科学は、日本でもほぼ同時代的に紹介されてはいたが、それは日本のヴェーバー研究とは接点を持たないままであった。たしかに、進化論的色彩を持つ発展段階論に支えられたマルクスをヴェーバーから批判的に検討することはあったが、ヴェーバー研究は、進化論あるいは社会ダーウィニズムの影響を受けた社会学説から分断され、前者による後者への有効な批判を取り出されず、それは現代にまで残っている問題である。

ヴェーバーは、古プロテスタンティズムの倫理が西欧近代資本主義の担い手たちの生活態度に及ぼした影響が、資本主義のあり方そのものに重要な刻印をなしたこと、しかし資本主義の矛盾の深化とともに、その生活態度が変質を被り、さらに第二帝政期ドイツ特有の「精神」の問題性が顕在化したことを鋭く把捉した。一方、ヴェーバーは、古プロテスタンティズムと、非キリスト圏における精神世界とを対比し、「資本主義の精神」を、世界史的視野においてどのように位置づけるのかを考究し、浩瀚な『宗教社会学論集』を書きつづけた。ここに、比較社会学的視座におけるアジア論が開拓されていった。

ところが、従来のヴェーバー研究者たちにあっては、古プロテスタンティズムのみが直接「資本主義の精神」の淵源となったかのような雑駁な誤読がなされ、またヴェーバーのアジア論を正当に評価しようとしない傾向も認められた。これにたいして、われわれは、「資本主義の精神」の正確な理解への途を拓こうとし、またヴェーバーの比較社会学的アジア論からの積極的な摂取を図ってきた。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、禁欲的プロテスタンティズムを礼賛した著作ではない。むしろ、人間よりも職業を優位に置いた古プロテスタンティズムの倒錯性を告発し、その影響下で生成した資本主義の生活精神の非人間性をいかに打破するかを希求した知的活動の一環として産出された研究成果である。さらに、腐朽化する現代資本主義における倫理の喪失は、日本をはじめとする後発資本主義諸国にも深刻な悪影響を及ぼすのであり、そのことは、ほかならぬヴェーバー自身が、『宗教社会学論集』中の『ヒンドゥー教と仏教』等において明示している。したがって、《倫理→生活精神→資本主義の生成》というベクトルとともに（あるいはそれ以上に）、《確立した資本主義→生活精神→倫理》というベクトルにも十分に目配りをして、近代日本資本主義の諸問題を考察する必要がある。

「資本主義の精神」論の再検証作業を進めること、ラートゲンに導かれたヴェーバーのアジア論・日本論の意義を解明すること、さらに、ヴェーバー理論を援用した比較アジア社会論を構築することは、あらためていうまでもなく重要な課題である。

（5）　ヨーロッパの社会思想とドイツにおける社会科学・社会学の再編

ヨーロッパ社会史・社会思想史に関連して、十九世紀の貧困観を、救貧政策、社会事業、社会調査の発展との相互作用について検討した。また、二十世紀初頭のドイツ社会科学において、一方では新カント派の影響を受けた法哲学の再興などの動きがあり、他方では進化論・優生思想の影響力拡大がみられ、多くの社会科学者がその両者との対抗を通じて、新たな理論・思想を確立しようとしていた。そしてこうした動向のひとつとして、ドイツ社会学の確立・制度化が進展していた。社会学と法学・国家学との関わりについて、とくにルドルフ・シュタムラーの法哲学とヴェーバー社会学との関連および相互批判について考究した。また、ゾンバルトからルーヨ・ブレンターノへの 1905 年 2 月 1 日付書簡を分析した結果、この書簡が、ゾンバルトの『近代資本主義（初版）』（1902 年）の評価をめぐる両者の対立と関係していることが判明した。さらに、第一次大戦期における日独関係について、法的側面から検討を加えた。

帝政期ドイツにおける性とセクシュアリティをめぐる言説の諸様相を、市民女性運動、性改革運動のひとつである母性保護連盟、および性科学・優生学・人種理論などの言説から分析した。とくに、自然科学的言説でもって社会や人間の規範的あり方を一元的に論じる傾向にたいして、マリアンネ・ヴェーバーが、人間の自然的不平等や生物学的性差を根拠に「低価値者」や女性の社会的・法的劣位を肯定しかねない議論であると批判したことを明らかにした。これはマックス・ヴェーバーの「価値自由」論とも重なる視座であり、市民女性運動穏健派の担い手たちとドイツ社会学創成期の科学者たちとの知的影響関係の一面を推測させるものである。また、マリアンネがドイツ民主党から出馬してバーデン憲法制定議会議員となる経緯と、この時期の彼女の言説を追究した。それにより、女性参政権導入期において、リベラル・デモクラシーと女性の政治的権利を関連づけ、その政治的主体性を確立しようとする思想的試みの一様相を明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計33件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 野崎敏郎	４．巻 74
２．論文標題 マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相―フライブルク大学移籍とハイデルベルク大学正嘱託教授案件―（3）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 佛教大学社会学部論集	６．最初と最後の頁 41-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野崎敏郎	４．巻 73
２．論文標題 マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相―フライブルク大学移籍とハイデルベルク大学正嘱託教授案件―（2）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 佛教大学社会学部論集	６．最初と最後の頁 29-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野崎敏郎	４．巻 72
２．論文標題 マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相―フライブルク大学移籍とハイデルベルク大学正嘱託教授案件―（1）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 佛教大学社会学部論集	６．最初と最後の頁 21-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野崎敏郎	４．巻 43
２．論文標題 『職業としての学問』と大学闘争の新しい課題―野口雅弘の『新訳』をめぐって―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 佛大社会学	６．最初と最後の頁 16-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野崎敏郎	4．巻 69
2．論文標題 《闘争する人格》と大学問題―『職業としての学問』をいかに読むか―（5）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 佛教大学社会学部論集	6．最初と最後の頁 77-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 恒木健太郎	4．巻 705
2．論文標題 貨幣・信用理論史研究の現状とドイツ経済思想史との関係について―古川顕『貨幣論の革新者たち―貨幣と信用の理論と歴史』（ナカニシヤ出版、2021年）をめぐって―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 専修大学社会科学研究所月報	6．最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 恒木健太郎	4．巻 58(3)
2．論文標題 書評：『19世紀前半のドイツ経済思想―ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト―』（原田哲史著、ミネルヴァ書房、2020年）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊経済理論	6．最初と最後の頁 89-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 恒木健太郎	4．巻 64(1)
2．論文標題 書評：『大塚久雄から資本主義と共同体を考える―コモンウィール・結社・ネーション―』（梅津順一・小野塚知二編著、日本経済評論社、2018年）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 歴史と経済	6．最初と最後の頁 56-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 恒木健太郎	4．巻 93(1)
2．論文標題 戦後日本の『近代主義』の出立点―消された戦中から戦後への転換―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 法律時報	6．最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 恒木健太郎	4．巻 45
2．論文標題 書評：『大正デモクラットの精神史―東アジアにおける「知識人」の誕生―』（武藤秀太郎著、慶應義塾大学出版会、2020年）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会思想史研究	6．最初と最後の頁 207-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 恒木健太郎	4．巻 48(17)
2．論文標題 誰にとって『非合理的』なのか―大塚久雄におけるヴェーバー生誕100年シンポと戦中・戦後―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 63-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 恒木健太郎	4．巻 152
2．論文標題 「資本主義と市民社会」の戦中と戦後―大塚久雄の問題意識の連続と断絶―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 季報唯物論研究	6．最初と最後の頁 16-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 恒木健太郎	4．巻 666
2．論文標題 『戦中史』と『国体論』を貫くもの	5．発行年 2018年
3．雑誌名 専修大学社会科学研究所月報	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木宗徳	4．巻 719･720
2．論文標題 イギリスの大衆メディアにおける貧困報道―連立政権下の福祉改革への影響を中心に―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大原社会問題研究所雑誌 = Journal of Ohara Institute for Social Research	6．最初と最後の頁 71～85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15002/00021414	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木宗徳	4．巻 276
2．論文標題 左派ポピュリズムと不服従の知	5．発行年 2019年
3．雑誌名 経済系：関東学院大学経済経営学会研究論集	6．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木宗徳	4．巻 733
2．論文標題 福祉ショービニズムとコンディショナリティ―イギリス連立政権期の政策と世論をめぐって―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大原社会問題研究所雑誌	6．最初と最後の頁 19-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木宗徳	4．巻 26
2．論文標題 コロナ禍に隠された「分断」に目を凝らす―生権力を下から統御するため―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 唯物論研究年誌	6．最初と最後の頁 8-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三笘利幸	4．巻 55(4)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーと「近代文化」―『倫理』論文は何を問うのか―(7)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 立命館大学産業社会論集	6．最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三笘利幸	4．巻 55(3)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーと「近代文化」―『倫理』論文は何を問うのか―(6)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館大学産業社会論集	6．最初と最後の頁 53-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三笘利幸	4．巻 56(2)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーと「近代文化」―『倫理』論文は何を問うのか―(5)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館大学産業社会論集	6．最初と最後の頁 65-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三笘利幸	4．巻 56(1)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーと「近代文化」―『倫理』論文は何を問うのか―(4)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館大学産業社会論集	6．最初と最後の頁 179-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三笘利幸	4．巻 55(4)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーと「近代文化」―『倫理』論文は何を問うのか―(3)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 立命館大学産業社会論集	6．最初と最後の頁 21-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三笘利幸	4．巻 55(3)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーと「近代文化」―『倫理』論文は何を問うのか―(2)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立命館大学産業社会論集	6．最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三笘利幸	4．巻 55(2)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーと「近代文化」―『倫理』論文は何を問うのか―(1)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立命館大学産業社会論集	6．最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 三笘利幸	4．巻 55(1)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーにおける「科学的問題」とは	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立命館大学産業社会論集	6．最初と最後の頁 231-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内藤葉子	4．巻 72
2．論文標題 性と権力―帝政期ドイツにおける性の〈世俗化〉を背景に―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 人文研ブックレット	6．最初と最後の頁 106-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内藤葉子	4．巻 17
2．論文標題 帝政期ドイツにおける性をめぐる科学的言説と女性の主体性―マリアンネ・ヴェーバーの〈自然〉概念批判に関する一考察―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 ジェンダー史学	6．最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内藤葉子	4．巻 21
2．論文標題 ドイツ市民女性運動と女性の政治参加―帝政期からヴァイマール初期にかけてのマリアンネ・ヴェーバーを中心に―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 政治思想研究	6．最初と最後の頁 131-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内藤葉子	4．巻 48(17)
2．論文標題 マックス・ヴェーバーとマリアンネ・ヴェーバー―性・性愛・結婚に関する議論をめぐる一試論―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 272-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Menkhaus, Heinrich	4．巻 28
2．論文標題 Der Japanisch -Preussische Freundschafts-, Schiffahrts-und Handelsvertrag von 1861 - Eine juristische Analyse anlaesslich der offiziellen Feier des 160. Jubilaeums des Beginns der japanisch-deutschen diplomatischen Beziehungen: Teil 1 -	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Meiji Law Journal	6．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Menkhaus, Heinrich	4．巻 27
2．論文標題 Die deutsch-japanischen Beziehungen im Ersten Weltkrieg aus juristischer Perspektive	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Meiji Law Journal	6．最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 橋本直人	4．巻 15(2)
2．論文標題 マックス・ウェーバーの理論的変化に関する計量テキスト分析の試み―『経済と社会』旧稿と改定稿の比較を事例として―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	6．最初と最後の頁 91-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81013205	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 橋本直人	4．巻 13（2）
2．論文標題 マックス・ウェーバーとルドルフ・シュタムラーの論争について―シュタムラーによる反批判の翻訳と解説として―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要	6．最初と最後の頁 81-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81012177	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 野崎敏郎
2．発表標題 カール・ラートゲンと東京大学・帝国大学の学生たち
3．学会等名 シンポジウム「近代日独社会科学者たちの知的交流とその時代―ヴェーバー没後百年、ラートゲン没後百年記念シンポジウム―」佛教大学
4．発表年 2022年

1．発表者名 野崎敏郎
2．発表標題 十九世紀末ドイツの大学問題とヴェーバーの闘争―アルトホフによるフライブルク招聘妨害事件の実相―
3．学会等名 ヴェーバー没後100年記念シンポジウム準備会
4．発表年 2020年

1．発表者名 田中智子
2．発表標題 明治期における専門・高等教育機関設置地としての岡山―地域利益の段階的変容―
3．学会等名 全国地方教育史学会第44回大会シンポジウム
4．発表年 2021年

１．発表者名 田中智子
２．発表標題 田口卯吉・帝国大学・ラートゲン―明治期大学史の複眼的理解に向けて―
３．学会等名 シンポジウム「近代日独社会科学者たちの知的交流とその時代―ヴェーバー没後百年、ラートゲン没後百年記念シンポジウム―」
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中智子
２．発表標題 「学問の都」「大学の町」はいかにして生まれたか―近代京都・高等教育ことはじめ―
３．学会等名 2020年度京カレッジ・京都学講座
４．発表年 2020年

１．発表者名 恒木健太郎
２．発表標題 戦時下大塚久雄のマックス・ヴェーバー批判―出口勇蔵との関連で―
３．学会等名 シンポジウム「近代日独社会科学者たちの知的交流とその時代―ヴェーバー没後百年、ラートゲン没後百年記念シンポジウム―」
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kentaro Tsuneki
２．発表標題 "Becoming (Werden)" and "Being of Having Become (Gewordensein)": Criticism of Max Weber in Japan during WWII
３．学会等名 Online Symposium: Globalizing the Social Sciences: German-East Asian Entanglements in the 19th and 20th Century, Deutsches Institut fuer Japanstudien
４．発表年 2021年

１．発表者名 三笘利幸
２．発表標題 「機械的化石化」をめぐって―日本における『倫理』論文受容の問題―
３．学会等名 シンポジウム「近代日独社会科学者たちの知的交流とその時代―ヴェーバー没後百年、ラートゲン没後百年記念シンポジウム―」
４．発表年 2022年

１．発表者名 内藤葉子
２．発表標題 性・性愛・科学―〈自然〉に対するマリアンネ・ヴェーバーの批判的視座の射程―
３．学会等名 マックス・ヴェーバー没後100年シンポジウム「学知の危機とマックス・ヴェーバー―科学主義と反知性主義を超える―」
４．発表年 2021年

１．発表者名 内藤葉子
２．発表標題 性と権力―帝政期ドイツにおける性の〈世俗化〉を背景に―
３．学会等名 同志社大学人文科学研究所連続講座「〈性の管理〉の近現代史―日本・ヨーロッパ・アメリカ―」
４．発表年 2021年

１．発表者名 内藤葉子
２．発表標題 帝政期ドイツにおける市民女性運動と女性の政治参加―マリアンネ・ヴェーバーを中心に
３．学会等名 第27回政治思想学会研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 内藤葉子
２．発表標題 帝政期ドイツにおける〈科学的〉言説の諸相―女性・性・セクシュアリティを中心に―
３．学会等名 第11回ヴェーバー研究21
４．発表年 2019年

１．発表者名 橋本直人
２．発表標題 マックス・ヴェーバーと〈意味〉の地平―科学主義・シュタムラー・ドイツ社会学の間で―
３．学会等名 マックス・ヴェーバー没後100年シンポジウム「学知の危機とマックス・ヴェーバー―科学主義と反知性主義を超える―」
４．発表年 2021年

１．発表者名 橋本直人
２．発表標題 社会的意味の計量分析―ウェーバー「暴力」論のテキストマイニング―
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 恒木健太郎	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 403（恒木担当pp．353-383）
３．書名 最強のマルクス経済学講義（松尾匡編）	

１．著者名 橋本直人	４．発行年 2021年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 166（橋本担当pp．43-69）
３．書名 テキスト計量の最前線―データ時代の社会知を拓く―	

１．著者名 Menkhaus, Heinrich	４．発行年 2020年
２．出版社 Duncker & Humbot	５．総ページ数 287（Menkhaus担当pp．201-220）
３．書名 Der Erste Weltkrieg und seine Folgen fuer das Zusammenleben der Voelker in Mittel- und Ostmitteleuropa, Teil 3.	

１．著者名 恒木健太郎・左近幸村編	４．発行年 2020年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 269
３．書名 歴史学の縁取り方―フレームワークの史学史―	

１．著者名 同志社大学人文科学研究所編（田中智子共同編集）	４．発行年 2020年
２．出版社 木立の文庫	５．総ページ数 592
３．書名 新島襄 英文来簡集	

１．著者名 内藤葉子	４．発行年 2019年
２．出版社 風行社	５．総ページ数 292+vii
３．書名 ヴェーバーの心情倫理―国家の暴力と抵抗の主体―	

１．著者名 田中智子	４．発行年 2018年
２．出版社 思文閣出版	５．総ページ数 vi+528+xii（田中担当pp. 345-378）
３．書名 近代天皇制と社会（高木博志編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田中　智子 (Tomoko Tanaka) (00379041)	京都大学・教育学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	恒木　健太郎 (Kentaro Tsuneki) (30456769)	専修大学・経済学部・准教授 (32634)	
研究分担者	鈴木　宗徳 (Munenori Suzuki) (60329745)	法政大学・社会学部・教授 (32675)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三笘　利幸 (Toshiyuki Mitoma) (60412615)	立命館大学・産業社会学部・教授 (34315)	
研究分担者	内藤　葉子 (Yoko Naito) (70440998)	大阪府立大学・人間社会システム科学研究科・准教授 (24403)	
研究分担者	メンクハウス　ハインリッヒ (Heinrich Menkhaus) (70515915)	明治大学・法学部・専任教授 (32682)	
研究分担者	橋本　直人 (Naoto Hashimoto) (80324896)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	大窪　善人 (Yoshio Okubo) (70815977)	佛教大学・公私立大学の部局等・非常勤講師 (34314)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関